

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2018年度 共同研究成果報告書〔研究費配分型〕

2019年 4月 10日 提出

1. 研究課題名	
近代から戦後京都における「都市景観」と「京町家の暮らし」の変化に関する研究 (英文標記: Study on the change of urban landscape and the livelihood in Kyo-machiya in the modern and postwar Kyoto)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
高橋 彰(たかはしあきら)	関西学院大学総合政策学部 契約助手
3. 研究分担者 (合計: 名)	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
矢野桂司(やのけいじ)	立命館大学 教授
河角直美(かわすみなおみ)	立命館大学 准教授
高木良枝(たかぎよしえ)	立命館大学 客員研究員
井上学(いのうえまなぶ)	立命館大学 客員研究員
佐藤弘隆(さとうひろたか)	立命館大学 博士課程後期課程
山本 峻平(やまもとしゅんぺい)	立命館大学 博士課程前期課程
大菅直(おおすがただし)	株式会社 光影堂 代表取締役
北本 朝展(きたもとあさのぶ)	国立情報学研究所 准教授

4. 研究課題の概要
<p>本研究は近代から戦後京都における「都市景観」と「京町家の暮らし」の変化に関する資料を収集し、戦後京都の記憶と合わせてアーカイブするものである。</p> <p>都市景観においては、戦後から現在まで、市街地は画一的な宅地開発や建築活動が進み、京都らしい町並み、景観は失われつつある。京町家を取り壊されることで、そこに蓄積された暮らしの文化も同様に失われ、日常的な作法や祭礼、文書や所蔵品などを維持・継承することも難しくなっている。</p> <p>これからの地域の景観形成の方針や京町家の保全・継承を考える上で、京都の現状や変化を分かりやすく客観的に伝える資料は重要であると考えられるが、戦後、高度経済成長以降の京都を取り巻く状況の変化は急激であり、その変化を理解しやすい形でまとめられた資料は希少となっている。</p> <p>そこで、本研究は、まず、(戦前)戦後京都の古写真と記憶を合わせてアーカイブし、そこに現在の写真を比較することで「京町家の暮らし」と「都市景観」の変化を理解しやすくビジュアルで伝える資料作成を検討するとともに、京町家</p>

に残る資料を読み解くことで、ヒアリングからではわからないことを補完的に説明する資料のアーカイブを目指す。アーカイブした資料は、地域の暮らしや文化を含んだ「京町家の暮らし」を継承する材料になると考えられるとともに、地域学習や観光まちあるきなどへの発展的利用もあわせて検討する。

5. 研究成果の概要

本研究は近代から戦後京都における「都市景観」と「京町家の暮らし」の変化に関する資料を収集し、戦後京都の記憶と合わせてアーカイブするものである。「都市整備」に関する資料については、京都の都市整備の中で、社会的、景観的な影響が大きかったと考えられる京都市電の敷設に関連し、申請者らと立命館大学アート・リサーチセンターが構築し、既に公開されている「京都の鉄道・バス 写真データベース」の充実を図るとともに、展示会「今昔写真から見える京都の変遷 ～市電の音が聞こえる風景と現在～」を実施した。また、京都の鉄道・バス 写真データベースを活用したスマホアプリ「KYOTO メモリーグラフ(国立情報学研究所北本朝展准教授開発)」の実証実験を実施し、地域学習やまちづくりにおける古写真の活用を検討した。「京町家の暮らし」においては、下京区に立地する大型町家でもともと雑穀商を営んでいた「N 家」をケーススタディとし、所蔵された 100 点もの古文書(近代を含む)の整理し、釈文を実施するとともに、一部解題し、京町家を継承していくための資料や記憶のアーカイブの在り方を検討した。